

# 日本を代表する海水魚・淡水魚を中心に約1,000種掲載。精緻な写真と最新情報が満載!

## さかなの目 その目

編・監修  
**中坊徹次**  
(京都大学名誉教授)

魚の形態は生態と関係して様々な特徴を示す。その微細な構造は進化の結果であり、これを精緻な写真で見てください。これが「さかなの目」。何歳でどれだけ大きくなり、いつ、どこで次世代を残す産卵をするのか、魚にとって大切である。これらを知っていただく。これも「さかなの目」。日本列島の魚は、ユーラシア、東南アジア、インド、アフリカ、オーストラリア、南北アメリカなどの沿岸と陸地に同じ種や近縁の種がいる。地理的な分布の広がりや過去から現在に至る系統進化の結果である。これを示すことで広い視野で日本の魚を理解していただく。これが「その目」。これらの目で日本の魚を詳しく知り、楽しんでいただければと思います。

最先端の知識を掲載  
執筆は47名の最前線の魚類学者

日本人との関わりがわかる  
食材としての水産資源維持  
稀少種保全のための知識を掲載

さかなの目  
ブリとヒラマサを正面から見比べるとブリの方が丸いことがよくわかる。

その目  
ブリとヒラマサの分布図を見ると海外に類似のブリ属の魚がいるのがわかる。



**ラブカ目 Chlamydoselachiformes**  
**ラブカ科 Chlamydoselachidae** 南アフリカ産のものは新種 *Chlamydoselachus africanus* として記載された。世界に1属2種、日本に1属1種。  
**ラブカ(ラブカ属) 軽度懸念 (IUCN)**  
*Chlamydoselachus anguineus* Garman, 1884  
体は黒褐色、縦長くウナギ形に近く、柔らかい。頭部はヘビの形に似て縦扁。鰓孔は6対、上端は頭部背面、下端は頭部腹面の喉部に近づく。左右の第1鰓孔は喉部でつながる。鰓孔の外縁はフリル状。鰓が鰓膜に張り付いているのが外から見える。口は吻端で、大きく、眼のはるか後方に達する。眼は大きく、瞬膜がある。背鰭は1基で尾柄部にある。歯は主に3尖頭だが、長い尖頭の間の根元に小さな棘があり、列をなして並ぶ。この歯はクラドダス型とよばれ、板鰓類の中で、祖先的なものに相当する。胎生、卵胎盤型。胎仔数は2~12、平均6個体が右の子宮だけに入っている。子宮内の卵は直径10~12cmと大きい。卵は薄い卵殻に包まれ、胎仔は全長6~8cmになると卵殻から出る。子宮内で全長55cm、体重380gになって産出される。胎仔は卵黄から栄養を得て成長するが、全長40cmごろから卵黄は急に小さくなり、これ以後は母体から栄養を得ていると考えられるがよくわかっていない。妊娠期間は3.5年とかなり長い。



**エドアブラサメ**  
胎仔の性比は1:1。雄は全長1.1m、雌は全長1.4~1.5mで成熟。水深120~1500mの大陸棚外縁に生息し、活発に泳ぎ、イカ類や魚類を食べる。相模灘、駿河湾、紀伊水道外海域、沖縄沖、オーストラリア東岸、ニュージーランド、ミッドウェー諸島、カリフォルニア沖、チリ沖、スリナム・仏領ギアナ沖、ミッドアトランティックバイト、北大西洋中央部、中部~北部東大西洋、アフリカ中部西岸に分布。英名はFrieded shark。  
**カグラザメ目 Hexanchiformes** デボン紀中期のオーストラリア・クィーンズランド西部から見つかった歯化石はカグラザメ目ものと形が似ている。現生のサメ類は新軟骨類に含められるが、最古の新軟骨類は三畳紀初期



専門家も驚く貴重な写真  
魚類写真家による精彩な写真で、多様な魚類の形態、生態に迫ります。

さかなの目  
滅多に見られないサメ「ラブカ」。その歯も、小さな棘が並び祖先的な珍しい形をしている。

環境写真も充実  
淡水魚の一部には生息する環境の写真も紹介。



**ブリ属 Seriola** 鰓蓋に後縁がなく、鰓蓋に暗色の横帯や斜帯がない。日本近海には4種が生息し、体が尾丈長1~1.5mと大きくなる。ブリとヒラマサはカンパチやヒレナガカンパチに比べて、遊泳型の体形をもち、より沖合に生息。  
**ブリ Seriola quinqueradiata** Temminck and Schlegel, 1845 孵化した全長約1.5cmまでの仔魚は表層で浮遊生活をし、各鰓葉が完成して稚魚になれば流れ藻につき、その中で成長する。全長が約3cmから体に横帯ができ、モジャコとよばれる。全長が7.5~16cmになると体の横帯が消え流れ藻を離れ、沿岸の浅所に向かう。1~2歳の尾丈長40~60cmのものは各地でイナダ(和歌山県から東北地方)、ワラサ(東海地方から伊豆)、ハマチ(高知から和歌山)、フクラギ(北陸地方)とよばれている。3歳後半からの尾丈長75cm以上の大きな個体はブリとよばれるが、地名として、オオイオ(高知)、オオウツ(北九州)がある。4~5歳で尾丈長90cm、多くは3歳か4歳で尾丈長80cmとなる。



**ブリ属 Seriola** 鰓蓋に後縁がなく、鰓蓋に暗色の横帯や斜帯がない。日本近海には4種が生息し、体が尾丈長1~1.5mと大きくなる。ブリとヒラマサはカンパチやヒレナガカンパチに比べて、遊泳型の体形をもち、より沖合に生息。  
**ブリ Seriola quinqueradiata** Temminck and Schlegel, 1845 孵化した全長約1.5cmまでの仔魚は表層で浮遊生活をし、各鰓葉が完成して稚魚になれば流れ藻につき、その中で成長する。全長が約3cmから体に横帯ができ、モジャコとよばれる。全長が7.5~16cmになると体の横帯が消え流れ藻を離れ、沿岸の浅所に向かう。1~2歳の尾丈長40~60cmのものは各地でイナダ(和歌山県から東北地方)、ワラサ(東海地方から伊豆)、ハマチ(高知から和歌山)、フクラギ(北陸地方)とよばれている。3歳後半からの尾丈長75cm以上の大きな個体はブリとよばれるが、地名として、オオイオ(高知)、オオウツ(北九州)がある。4~5歳で尾丈長90cm、多くは3歳か4歳で尾丈長80cmとなる。

驚く様な「さかなの目」をたっぷりあなたに

- ◇コバンザメの吸盤は、じつは背びれが変形したものである。
- ◇シビレイの皮をむくと、巨大な発電器官がよくわかる。
- ◇ジンベエザメのえらの内側は、なんとスポンジのようになっている。
- ◇サメの仲間には、目の他にも光を感じる「孔」がある。(アオザメ)
- ◇アカエイの毒棘はノコギリ状になっており、さらに毒液を導く溝がある。
- ◇サメの多くは卵でなく子どもで生まれ、へその緒までついているものもいる。
- ◇アユの口には、藻類を食べるための細かい櫛のような歯がびっしり生えている。
- ◇ヤツメウナギのなかまには、他の魚に吸い付いて血液を吸って暮らすものがある。
- ◇アンコウには「正規の歯」のほかに口の奥にさらに巨大な歯があり、つかまえた獲物を逃さないような仕組みになっている(実はこのような歯をもつ魚は少ない)。
- ◇日本のメダカは2種類に分かれ、ミナメダカとキタノメダカになった。そのちがいは?
- ◇「毒魚」ミノカサゴやオニオコゼの毒針は、拡大すると鋭利な「キリ」のようになっている。
- ◇日本のイカナゴは3種いるが、そっくりすぎて専門家でも見分けがつかない。..... etc.